



『私は3歳の頃に、私の母の弟夫婦（おじさん）の家に養子になりました。おじさん夫婦には子どもがなかったのが理由です。母方実家の跡取りとして迎え入れられたのでした。実の両親が暮らす地域の隣町におじ宅はあったので、両家の交流は頻繁にありました。大きくなるにつれ、何かあれば、3歳上の姉を頼りました』

#### 【ミニコメント】

幼い頃、親戚の家に養子に出されるというケースがあります。この母親から見れば、「実の親だけれどおじさん・おばさん」と「おじさん・おばさんだけれど養親」という事態が生じることとなります。また、「実のきょうだいであるけれどいどこ」という関係も生まれます。

このような場合、家族や親戚間の関係に関して複雑な心境となっても不思議ではありません。

実際に『養父母にはずいぶん気を遣いました』というのが母親の語りです。

## 母親の語り その2

『最初の結婚はお見合いでした。22歳の時です。婿養子に来てくれるというのが前提だったので、養父母の薦める相手と結婚しました。

夫はとても大人しい人でした。しかし、お酒が入ると人が変わったようになりました。私は夫と養父母との間でずいぶん気を遣い、一時期、不眠になりました。結局、養父母が言うまま、離婚することになったのです』

『その後、再婚することになりました。やはり、見合い結婚でした。離婚歴や婿養子に入るということも承知で結婚してくれた現在の夫にはとても感謝しています。長男は養父母に大変可愛がられました。例えば、小学校高学年までは、養父母の部屋で寝ていました。長女は夫がとても可愛がりました。そのような中で生まれた次女が唯一心の支えになっています』

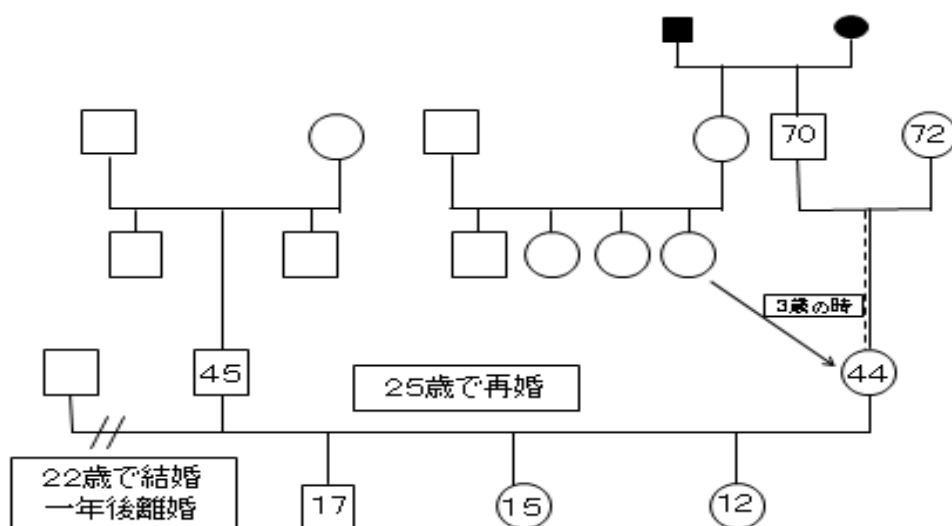
#### 【ミニコメント】

家族の歴史を辿ることによって、母親の理解が深まりました。家族に対してでさえ、人一倍気遣いをする中で、これまで過ごしてきたようです。これまでの苦労をねぎらう言葉に続いて話されたのが、次のような内容でした。

## 母親の語り その3

『次女は私の実の姉と重なるのか、いろいろなことを安心して話せるのです…。長男は養父母にとられた感じ、長女は夫にとられた思いがありました。い

つの頃からか、次女のみが私の支えになったのです。成長していく次女の姿を見ていて、うれしい反面、私の手元から離れていくかもしれないと思ったら不安でした。正直なところ、学校に行って、私の知らない世界を作っていくよりも、行かなくてもいいから、手元にいてくれる方がという気持ちが強いです…』



## 母親の語り その4

母『これまで、いろいろな面で気遣いをしてきたので、私にとっては次女だけが支えだったのです…。でも、次女は、結局、私と同じように、家族に気を使っていたのかもしれないね。負担だったかもしれないね』

### 【ミニコラム】

母親は思い出しながら、これまでの生活を語りました。その際に、役に立ったのが、母親の目の前で作成したジェノグラムです。

もちろん、ジェノグラムがなくても、母親の語りは展開したかもしれません。しかし、少なくとも、母親の語りを触発したのはジェノグラムでした。ジェノグラム上の人物を指さしながら、家族や親子関係についての話題が展開したのですから…。

## 改めて:家を継ぐことについて…

ところで、この家族の場合、母親は家を継ぐ役割を期待された子どもであり、配偶者選択にまで影響を与えていました。

家を継ぐ（具体的には土地や建物を始めとした財産の相続、さらにはお墓の守りなど）ために養子や養女を迎えるという家族に出会うことがあります。

そこには、家族のドラマが生まれるわけですから、家族の歴史とそれに伴う感情を丁寧に確認することによって、家族の理解が深まっていくことになります。

そのプロセスにジェノグラムが寄与することが多いのではと感じています。

(つづく)